

主題	ターミナルケアに関わる介護職や家族の気持ちの共有を図る取組み
副題	最期まで利用者が望む生活を追求するためのアセスメント。 不安だけではなく充実感を伴ったターミナル期を過ごすために。
ターミナルケア	アセスメント

研究期間	3ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム フォーライフ桃郷
発表者：篠 隼人（しの はやと）	アドバイザー：加賀 里実（かが さとみ）		
共同研究者： 深澤絵美 桑江通友 千田珠恵 伊藤玲子			

電話	03-3300-1600	メール	soudan@jyusinkai.or.jp
FAX	03-3300-1607	URL	www.jyusinkai.or.jp

今回発表の事業所やサービスの紹介	当施設は、平成17年に世田谷区北烏山の住宅地に開設した、全室個室のユニット型特別養護老人ホームです。入所の定員は60名で、デイサービスとショートステイを併設しています。周辺は緑に囲まれた自然豊かな土地で、気軽に散歩に出かけられる環境です。今回は平成23年10月から本格的に取り組みを開始した、当施設のターミナルケアについて紹介します。
------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

当施設がターミナルケアを開始して2年が経過し、同時に発足したターミナルケア委員会は、「日常生活の延長としてのターミナルケア」を謳って活動をしてきた。約20名の最期に関わってきた実績を振り返り、改めて課題を検証することになった。

きっかけは、「ターミナルケアに関わると精神的に辛い。立ち直れない。」という介護職の声と、「施設での看取りを望む家族と望まない家族の違いは何か。施設で亡くなることに納得しているのか。」という経営層の問いかけだった。ターミナルケア後のカンファレンスで介護職の精神的な負担を共有し軽減すること、また、家族からの感謝の言葉の数々から特段の問題意識を持たずに経過をしてきたが、今回投げかけられた課題に対して解決を試み、より充実したターミナルケアの実践を目的とし、本研究に取り組んだ。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

- 1、当施設のターミナルケアの課題を把握するため、ターミナルケアに関わってきた職員と家族にアンケートで意識調査を行うことで、ターミナルケアに対する本音の意見を聞き出す。
- 2、アンケート結果から、ターミナルケアに関わる介護職の精神的な負担を軽減する方法と、ターミナル期も含めた施設での生活に利用者や家族が求めることを実現する方法について、具体的な行動を起こす。
- 3、上記の経過を通して、ターミナルケアに関わる介護職の精神的な負担の軽減に加えて、「最期まで関わることができてよかった」と感じられる心の充実とケアに意向を反映できたという自信の獲得を図る。また、家族が抱えるターミナル期を含めた施設での生活に感じている不安や、施設に対する要望に応えられる仕組みを整える。

《3. 具体的な取り組みの内容》

①当施設のターミナルケア委員会は、介護職、看護師、ケアマネージャー、生活相談員から構成されている。マニュアルの整理や内部研修を主に活動してきたが、介護職や管理者から投げかけられた課題に應えるため、今回の調査実施に至った。

②平成25年4月20日～5月15日の期間で、当施設でターミナルケアを経験した家族19世帯と、職員（介護職・看護師・機能訓練士等）36名にターミナルケアに関するアンケートを実施した。

③職員アンケートは専用ボックスで回収し、回収率は72%。家族アンケートは郵送による返信を依頼して回収率は58%だった。その結果から、介護職は「自分たちのケアに自信が持てないている」という仮説を導き出し、また、家族アンケートはその内容と回収率をから「当施設のターミナルケアに印象のいい方からは回答が得られ、そうではない方は回答がなかった」という仮説を立てた。

④具体的な取り組みとして、介護職に対しては、より「日常生活の延長としてのターミナルケア」を意識できるように、他委員会と協力し、ターミナル期を意識したアセスメントシートの作成と活用を行った。また、家族に対してはターミナル期の関わり方を説明し、不安を軽減するための説明会を実施した。

《4. 取り組みの結果と考察》

アセスメントシートの書式を変更したことで、介護職が「日常生活の延長としてのターミナルケア」を意識して、生活歴から趣味や嗜好を把握し、意思表示が難しい方でも面会に来る家族からの情報収集により、その方が「どんな生活をしたいのか、その延長であるターミナル期にはどんな環境で過ごすことを望まれるのか」を記録に起こし、他職種と共有することが出来るようになった。生活歴を把握してケアに生かすことは意識してきたが、ターミナル期においては状態変化に対

応することで精一杯になってしまう、身構えて過剰に環境整備をしてしまうといった、「日常生活の延長」を意識した関わり方ができていなかった。今回の研究から、要介護度の高い利用者に対して、常に個々の望む生活環境を追求し、ケアに反映し続ける仕組みを整えることで、介護職の自信に繋げることができた。また、家族に対しての説明会では、「初めての体験することなので不安が大きい。また聞いてほしい。」という感想が多く寄せられた。

《5. まとめ、結論》

本人の意思が容易に確認できない場合、ターミナルケアに関わる介護職や家族の負担や不安は特に大きい。しかし、最期に関わるのは一度しかない。不安だけを抱くのではなく、充実感を伴ったターミナル期を過ごすためには、常日頃からの利用者の言葉や変化に関わりに反映していく努力と、それを家族とも共有することが必要だと実感した。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究を行うにあたり、職員・家族に対して、アンケートの内容は本研究以外では使用しないこと、それによって不利益を被ることはないことを文書で説明し、アンケートの回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「高齢者施設等における 看取りケアに関する手引き」 山形県村山保健所 発行

《8. 提案と発信》

居宅における生活への復帰支援も役割とする特別養護老人ホームでのターミナルケアは、地域包括ケアシステム導入により、その在り方がますます問われている。自宅で最期を迎えることが難しくても、住み慣れた地域に在る施設が、最期まで居たい「ホーム」であることが特別養護老人ホームの役割ではないだろうか。

【メモ欄】